

独思録：「定額給付金」(1/11)

今週は、世間一般に仕事始め。国会では、松の内から仕事始めの「定額給付金受け取り」に係わる空しい討論が続いています。

夏目漱石のエッセイ「元日」の中に

「元日新聞へ載（の）せるものには、どうも斯（こ）う云う困難が附帯して弱る。現に今原稿紙に向っているのは、実を云うと十二月二十三日である。家（うち）では餅（もち）もまだ搗（つ）かない。町内で松飾りを立てたものは一軒もない。机の前に坐（すわ）りながら何を書こうかと考えると、書く事の困難以外に何だか自分一人御先走（おさきばし）ってる様な気がする。それにも拘（かかわ）らず、書いてる事が何処（どこ）となく屠蘇（とそ）の香（か）を帯びているのは、正月を迎える想像力が豊富なためではない。何でも接（つ）ぎ合わせて物にしなければならぬ義務を心得た文学者だからである。もし世間が元日に対する僻見（へきけん）を撤回して、吉凶禍福（きっきょうかふく）共にこもごも起り得べき、平凡且（かつ）乱雑なる一日と見倣（みな）して呉（く）れる様になったら、余も亦（また）余所行（よそゆき）の色気を抜いて平常の心に立ち返る事が出来るから、たとい書く事に酔払いの調子が失せないにしても、もっと楽に片付けられるだろうと思う。」

という行があります。

麻生総理の定額給付金受け取りの答弁を聞いていると、夏目漱石以上に「もっと楽に片付けられるだろうと思う。」との心境でないかと同情する次第です。

もっとも、KY**3（空気が読めない・漢字が読めない・危険の予知ができない）の総理ですから、周りの心配を他所に、もっと気楽に考えていたのかもしれませんが。

定額給付金に関し、国民の過半数が反対または疑問を抱いているとも言われています。それでは、何故、与党はこれ程に意地になって成立を計ろうとしているのでしょうか。穿った見方だとは思いますが、新年会の酒の上で、公明党が定額給付金に固執するのは、「創価学会信者に渡される給付金が学会に寄付され、その後、……。」との放言があり、その席では「なるほど」と納得する雰囲気になりました。

では、自民党はというと、ある新聞によると「選挙で公明党のお世話になるから」賛成するそうです。

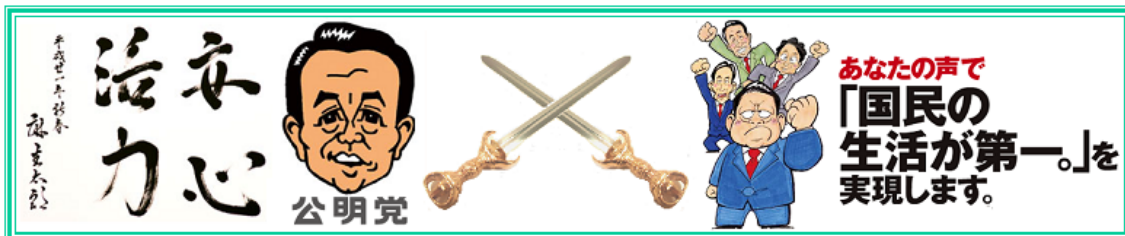
これが本当であれば、何の為の定額給付金でしょうか。さらに、新聞で言われているように「定額給付金で続く迷走、与党、使途・対象で見解乱れ」の経済対策では、景気刺激すら期待できません。

地方紙からも「定額給付金はやはり白紙撤回し、雇用対策など暮らしの安定に直結する分野に集中的に注ぐ方が良く、きのう9日までの国会論戦を聞いて、そう感じた人が多いのではないか。」という社説が出ています。

与党の中からも「公明党も考え抜かないで提案した。今回はみな賛成するが、今後自民党執行部に公明党と話し合ってほしい。」と定額給付金にからむ部分について参院での修正

を検討すべきだとの意見も出始めています。

定額給付金は、白紙撤回し、雇用対策など暮らしの安定に直結する分野に集中的に使うべきだと思います。



毎日：「定額給付金：続く迷走 与党、使途・対象で見解乱れ」(1/9)

定額給付金を巡って国会で攻勢を強める野党に対し、与党内の足並みは一向にそろわない。自民党の細田博之幹事長が「国会議員ももらって使うべきだ」と発言したかと思えば、今度は額賀福志郎元財務相が8日、給付金を党に集約して社会福祉などに役立てる独自案に言及した。法案提出後の迷走ぶりは、政府・与党が制度設計を途中で自治体に丸投げしたツケとも言える。

「自民党は（議員から）給付金を集め、社会福祉関係の団体への寄付とか、障害者が作った物の購入を検討してはどうか」。額賀氏は所属する津島派の会合でこう提案し、その後、細田氏にも伝えた。

山崎派の会合では平沢勝栄衆院議員が「定額給付金を受刑者にも配るのか。地元の葛飾区（東京）では問題になっている」と批判。山崎拓前副総裁が「その議論は法案を出す前にしないといけない」とたしなめた。

混乱の原因になった細田氏の発言も尾を引いている。自民党内では「なぜわざわざ言い出したのか。せっかく批判が沈静化してきたのに」との細田氏への不満がくすぶる。

一方で「公明党震源地説」も浮上。麻生太郎首相が4日夜、与党幹部らと会食した際、公明党の北側一雄幹事長が「『景気対策として首相ももらっている』と言った方が選挙に有利だ」と持ちかけ、同席していた細田氏が賛成した - - というものだ。これに対し、公明党幹部は「北側さんは野党から突っ込まれないよう閣僚答弁を統一してほしいと言っただけだ」と否定し、責任転嫁に不快感を示す。

公明党がこだわる給付金制度は、自民党にとっては「連立のコスト」(閣僚経験者)だけに、撤回の選択肢はない。「ここまで来たら、目をつぶって走り抜けるしかない」(党幹部)のが実情だ。



春秋：「初詣で」(1/5)

先週末、初詣での客でにぎわう埼玉県の鷲宮神社に足を運んだ。日本武尊（やまとたけるのみこと）ともゆかりの深い関東最古の大社。そんな公式の由緒より、若い人には、女子高校生 4 人組のほのぼのとした日常を描いた人気アニメ「らき すた」の舞台と言った方が通りがよかるう。

同名の漫画を原作とするテレビ番組の放映が 2 年前。4 人組の 2 人がこの神社の娘という設定からファンが訪れ始め、昨年の初詣で客は前年の 2 倍を超す 30 万人に。地元ではアニメをあしらった酒やせんべいも発売。今年も参拝客の列は商店街を長く延び、正月限定販売の関連商品には「売り切れ」の文字が並ぶ。

神の門前でアニメとはとまゆをひそめる向きもあろう。しかし日本の寺社は昔から庶民が娯楽に興じ、ストレスを発散させ、悩みや苦しみを和らげる観光と消費の場でもあった（安藤優一郎「観光都市江戸の誕生」）。屋台に茶店、見せ物の小屋。アニメ愛好家が増えればそれを採り入れるのはごく自然な流れだ。

英語や中国語、ハングルで作品への思いをつづった絵馬も目立つ。地元への経済効果は 1 億円を超すという。アニメなんてと考えていれば人も富も町を素通りしたはず。きょう仕事始めの会社も多い。頭を柔らかく、心を広く。ビジネスの種は無限にある。国の景気対策を待つより早道かも。

< 日本武尊 >

景行天皇の皇子で、仲哀天皇の父とされる人物。日本神話では英雄として登場する。記紀の記述によれば、2 世紀頃に存在したとされる。

九州の熊襲建兄弟の討伐、吉備や難波の邪神を退治などの西征や、焼津における野中の火攻めに遭ったときの草薙剣（天叢雲剣）の伝説や相模から上総に渡る走水の海における弟橘媛入水の説話などの東征と、日本各地を平定し、最後は伊勢で亡くなる。

実際には、4 世紀から 6、7 世紀頃の複数の英雄を具現化した架空の人物（という見方もある）。



熊襲建討伐



草薙剣(天叢雲剣)伝説

< 安藤優一郎 (1965-) >

歴史学者。専門は日本近世史（都市史）。千葉県出身。早稲田大学大学院文学研究科修了。文学博士。

国立歴史民俗博物館特別共同利用研究員、徳川林政史研究所研究協力員、新宿区史編纂員、早稲田大学講師、御蔵島島史編纂委員などを務める。

著書に、『寛政改革の都市政策 江戸の米価安定と飯米確保』『江戸の養生所』『観光都市江戸の誕生』『徳川将軍家の演出力』『江戸城・大奥の秘密』『大岡越前の構造改革 江戸のエリート経済官僚』など。



天声人語：「結局は選挙目当て」(1/8)

イソップの寓話(ぐうわ)には、正体を隠して着飾ってはみたが、結局はお里の知れる話がいくつかある。たとえば「ゼウスと狐(きつね)」の狐は、神であるゼウスに動物の王の位を授けられる。

しゃなりしゃなりと輿(こし)に乗る狐の目の前に、ゼウスは試しにコガネ虫を放す。すると狐は輿から飛び出し、なりふりかまわず捕まえる。ゼウスは怒って、狐を元の身分に戻してしまう。衣装で本性が変わらないことを、この話は説く。

さて定額給付金はどうだろう。「生活支援」だの「景気刺激」だのと衣装を着せても、お里は結局「選挙目当て」だろう。不人気が高じて、もはや効果も怪しいが、いまさら引けば面子(めんつ)をつぶすと、自公政権は輿を担いで右往左往。新春の政治の、お寒い光景である。

「生活給付金のイメージでスタートしたが、今は消費刺激に意義がある」。首相の弁は臨機応変というよりご都合主義だ。まずバラマキありきで、それから衣装。「もらわない」から「もらう」「使う」と変節する閣僚らは、「景気刺激」という衣装の仕立屋に他ならない。矜持(きょうじ)とやらは、どこへ行った。

「さるかに合戦」の昔話を思い出す。猿はおにぎりをすぐに食べるが、カニは柿の種を育てて実らせる。2兆円の巨額である。使うなら一時しのぎではなく、将来の安心につながる用途に、と望む「カニ派」は多い。

道に迷ったときは、元の場所に戻るのが登山の鉄則だ。無理に進めば危ないのは、あまたの遭難が教えている。迷走から引き返して地図と磁石を見直す度量が、政府与党にありやなしや。

<イソップ寓話「ゼウスと狐」>

神さまのゼウスは、キツネがたいそう頭が良くて気が利くのに感心して、動物の国の王さまにしました。

とはいっても、キツネが食いしんぼうで欲張りなことを知っているゼウスは、キツネが王さまになってから心がけも王さまらしくなったかどうか、知りたいと思いました。

そこでキツネの王さまが着かざって、カゴにゆられてしずしずと進んでくるところへ、ゼウスは一匹のコガネムシを飛ばせました。

目の前に大好物のコガネムシが飛んでくるのを見たキツネは、もう、食べたくてたまりません。

カゴの外に飛び出して、おともの者や見物人がおおぜい見ているのもかまわず、むちゅうになってコガネムシを追いかけました。

「いやはや、しょうのない王さまだ。やはりキツネはキツネか」

ゼウスはあきれて、キツネを王さまからはずしました。

このお話しは、見かけはりっぱになっても、なかみの人間はそうかんたんには変わらな

いと言うことをおしえています。

おしま

い

<日本昔話「さるかに合戦」>

むかし、さるとかにが、遊びに出かけました。かには、おむすびをひろい、さるは、柿の種をひろいました。さるはおむすびがほしくてたまりません。

「この柿の種は、地面にまけば、芽がでて木になって、柿の実がいっぱいなるぞ。そうすれば柿の実がたべほうだいた。」と、かにをだまして柿の種と、おむすびをとりかえました。

かには、一生懸命に柿の木を育てました。やがて柿が見事に実をつけると、さるがやってきて、木に登れないかんに「実をとってあげる」といって、木に登りました。しかし、いじわるさるは、おいしい実は自分が食べて、青い硬い実をかんになげつけました。かにはつぶれて死んでしまいました。

つづく



イソップ寓話「ゼウスと狐」



日本昔話「さるかに合戦」

編集手帳：「政権を支えようとしないう民党」(1/5)

日本では古来、スルメは縁起物である。正月飾りや婚礼、大相撲の土俵の下にも供え物として埋められる。生きのいいイカを開いて干す。手間をかけることで甘味やうま味が増して日持ちもする。

和歌山南漁協すさみ支所が特産のスルメイカを真空パックにしたはがき「するめーる」を作っている。1枚230円の年賀状バージョンは昨年末に2万枚を売った。明けまして...と届いたスルメをあぶり、友を思って杯を重ねた方もおられよう。

そんな正月気分が抜けない5日から通常国会が始まる。安倍、福田、麻生と首相の顔は今年も違う。麻生内閣は発足3か月余で支持率が急落した。自民党幹部は「味がなくなったらすぐに吐き捨てる。チューインガム政治でいいのか」と嘆く。

選挙目当てで国民に人気がありそうな人物をこぞって首相に推しておきながら、結束して政権を支えようとしないう民党も責めは免れまい。

賞味期限が近づいたら食品を店の棚から下げてしまうように、政治家を使い捨てにするばかりでは日本は貧しくなる。総選挙の年。噛(か)めば噛むほど味が出るスルメのような政治家を育てたい。

産経：「食べられる年賀状「するめーる」大人気 和歌山」(11/22)

スルメイカをはがき状にした、すさみ町の名物「するめーる」(1枚230円)の年賀状版がインターネットで紹介され、注文用ホームページ(HP)にアクセスが集中している。生産している和歌山南漁協すさみ支所ではイカの在庫がなくなり、石川県から急遽(きゅうきょ)仕入れるほどで思わぬフィーバーに大わらわだ。



するめーるは町特産のスルメイカを真空パックし、はがき状にしたもの。あて名などを記入するシールを添付し、受け取った後はスルメとして食べられる。

平成12年6月に発売し、「ウイルス対策不要」などのキャッチフレーズとともに町特産としてPR。年賀状版は毎年約2000~3000枚を販売しており、21年用(縦約20センチ、横約10センチ)はシールに「謹賀新年」の文字や、イカ、イセエビなどの海産物を描いたカルタをあしらひ、正月気分を演出している。

この年賀状がインターネットサイト大手のヤフーで紹介されると、ユニークさが受けて注文が殺到。町商工会のHP(<http://www.susami.org/>)に設けた注文画面はアクセス過多でパンク状態となり、閲覧数は7万ページビューを超えたという。

余録：「首相年頭発言」(1/9)

多事多難な時を迎えた首相の年頭発言には楽観的なものが多いようだ。思い出すのは1993年元日の宮沢喜一首相（当時）の発言だ。公邸での新年会で中国の鄧小平氏の言葉を紹介し「いろんなことがあっても、天が落ちることはない」と述べた。

政治改革や景気対策という難題を抱えていた宮沢首相は無用な心配をしても仕方がないという気持ちをその言葉に込めたのだろう。ところが、天こそ落ちてはこなかったものの、自民党は7月の衆院選で振るわず長期政権の座から滑り落ちた。

一方、2009年の年明けは麻生太郎首相が「悲観主義は気分によるものであり、楽観主義は意志によるものである」という言葉を紹介した。フランスの哲学者・アランの「幸福論」からの引用で、首相は「意志こそが未来を切り開く大きな力になる」と続けた。

深刻化する景気悪化と雇用危機をどう乗り切るか。いまがまさに政治の意志が必要とされる時だ。なのに、年頭発言とは裏腹に首相の意志が見えにくいのはどうしたことか。総額2兆円の定額給付金問題をめぐる発言が二転三転している。

高額所得者が受け取るのは好ましくないとしていたかと思えば、今度は所得制限を事実上撤回する考えを示す。では首相自身は受け取るのか受け取らないのか、と問われると「今後判断させていただく」と逃げに回る。

アランは「希望は、これを保持するにも意志に頼るしかない」とも書いている。首相はどうしても定額給付金を実施に移したいという希望を捨てたくないなら、自分はこうするとはっきり言った方がいい。その時の気分で発言をコロコロ変えるのは、楽観主義とはほど遠い。

< 宮沢喜一 (1919- 2007) >

第78代内閣総理大臣。東京帝国大学法学部卒業。広島県福山市出身。1942年大蔵省入省。1949年には池田勇人蔵相秘書官。1951年サンフランシスコ講和会議では全権随員として参加。

1991年、海部首相の退陣にともなう自由民主党総裁選挙で勝利、72歳にして内閣総理大臣に就任。リクルート事件などを巡って1993年6月に内閣不信任案が提出され、解散して総選挙を行うも敗れ、日本新党を中心とした細川内閣が成立。

1998年に小渕内閣が発足すると、経済危機打開のため要請を受けて大蔵大臣就任を。戦前の高橋是清に次ぐ、異例の総理大臣経験者の蔵相就任となった。



< 鄧小平 (1904-1997) >

中華人民共和国の政治家。四川省広安県生まれ。

マルクス主義者であるとともに、無産階級の革命家、政治家、外交家であり、中国共産党・中国人民解放軍、中華人民共和国の主要な指導者の1



人。

生涯に 3 回の失脚を乗り越え、史的唯物論の視点に基づく「改革開放」政策によって、中華人民共和国の市場経済化に着手、1978 年から 1992 年までの、事実上の中華人民共和国の最高権力者。

< アラン (1868-1951) >

フランスの哲学。本名エミール・オーギュスト・シャルティエ。ノルマンディー地方のモルターニュ生まれ。

高等師範学校卒業後、リセの教師となる。リセで教えていた時に、アラン名義で「デペーシュ・ド・ルーアン」紙にコラム「プロポ」を寄稿。

平和主義と反戦思想を持ちながら、46 歳で、第一次世界大戦に志願して従軍。3 年後に除隊してアンリ四世校の教職に戻る。

65 歳で教職を退職し、83 歳で亡くなるまで執筆活動を続けた。

著書に『精神と情念に関する 81 章』『諸芸術の体系』『裁かれた戦争』『幸福論』など。

